コミュニケ往来

NO 9
（発行）コミュニケ好き者会
（連絡先）尼崎市水堂横丁20　横木荘内
今井みさこ方
（旧・月刊キヌッツ関西読者会）
共料 送料 30円

共同体社会主義論のための覚え書（3）

実態国家論と構造国家論

マルクス主義の国家死滅論

「覚え書（2）」（コミュニケ往来7号）で紹介したようなマルクス、バクーニンらの国家観に共通しているものは、国家を「物理的に打破し得る実態的機構」と考えている点である。いいかえれば、これは「国家＝暴力機構」論と短絡させていた十九世紀的革命観の限界でもあった。これを私は「実態国家論」と名付けた。

一方、ラウンダウマーは「国家は一つの条件、人びとの間のある関係、人びとが互いにとる態度のある様式、人は国家を破壊するには、いまと別の関係に入ることにより、互いにいまと別の態度をとることによってである。」のという有名なテーゼを提出している。

それをより根源的に、哲学的に論理づけたのは、マルチン・ヌーバーである。

「われーなんじの関係は人格と人格、主体と主体の関係であり、「われーそれの関係は人間と物、主体と客体の関係であり、相互的ではなく、なんらかの利用、支配ないし統制を含んでいる。(2)そして前者の関係を共同体に、そして後者のそれを国家に求めている。

それをさらに明確に説明付けるのは大沢正道の国家論である。「共同体における凝集力はへわれーなんじ〉という超意識である。それに対し、利用体の核であるへわれーそれ〉は、それ自体凝集力とは反対に働く力、すなわち分解力でしかない。」その「利用体が共同体とは別の、独立した世界を形成し、それを保持していくためには……なんらかの凝集力が必須になってくる。それが権力に他ならない。」「権力が発生する基盤は、この人間同志の相互依存、相互利用そのものに内在している」

ラングウマー、ヌーバー、大沢の言葉を借りて紹介した、へ国家＝利用的人間関係様式〉とする考えを「構造国家論」と呼ぶことができる。

注 ①ラングウマー著『革命』
②ヌーバー著『我と如』

新たなる段階へ！

「月刊キヌッツ」関西読者会も一年をすぎた。備北のキャンプと重なった8月の例会が一度ぬけただけで、例会も一三回続けられてきた。

この一年をふりかえるとき、「読者会」・「コミュニケ往来」・「備北」の三角関係があいまいなままずるずるしてきたことを思いしる。また「月刊キヌッツ」との関係においても、「読者会」はもはや「キヌッツ」にこだわらず、「往来」にしても、読者にキヌッツ批判者の数がましている。

下図の関係は、もはや定式化できぬまでに流動化しているのが現実である。しかも、「備北」・「往来」が一人歩きするにつれ、事務が、複雑かつ増し、「往来」編集にも新たな刷新が必要となり、編集スタッフを増やした。この号がそのオー号である。まだまだ不慣れですが、寛容のない批判をお願します。

また「読者会」も、「月刊キヌッツ」のあいまいさ（マンネリ）にもみられるように――P.4――にそのまゝ立脚していたことを反省し、「月刊の例会で、「コミュニケ好き者会」と名称を変更し、新たに再出発することになった。

「コミュニケ往来」に関していえば、「往来」は以前のまゝ続けてゆくが共同体を実際にだ向していく人々の機関紙であることを再々度認識し、（以前同様）編集方針としたい。

最後になりましたが、「コミュニケ往来」を確実に出せるだけの財政を確保するために、今月から定価をつけました（二十円です）。「勝手に送られてくる」という受身的姿勢ではなく、自覚的に「往来」とのあやしい関係を作り出していこうではありませんか。

これを機会に、定期購読をお願します。

また、あなたの問題意識を原稿にして「往来」まで送って下さい。

道を長くしてまっていますから。

「コミュニケ好き者会」

次回例会は、
一九七二・一月二十三日（日）
午後一時より、府中市「府中市民会館」
（京阪電車「守口市」駅下車）
です。オマケシネマ〜〜〜〜〜〜ス。